

人里のイエスレタ

日本ホタルの会 2001/10 第19号

東南アジアとホタルの思い出

日本ホタルの会理事 常喜 豊

私は最近、年に1～2回の割合でマレーシア、インドネシアなどに行っている。目的は、現在の研究対象であるクロツヤムシという甲虫の仲間の生態調査と、そのサンプリング（標本集め）である。

クロツヤムシ類は朽木性の甲虫だが、このような虫が生息する熱帯林の周辺には、当然のことながらホタルをはじめ他の昆虫類も多い。東南アジアのホタルと言え、おびただしい数のホタルが1本の木に集まって同時明滅を繰り返す「ホタルのクリスマスツリー」が有名で、「地球の歩き方」（ダイヤモンド社）などの海外旅行ガイドでも紹介されている。残念ながら、私はまだこの同時明滅ホタルにお目にかかったことがないが、ホタルと言われて2つほど、すぐに思い出す光景がある。2つともボルネオ島北部の、マレーシア・サバ州でのことだ。

ひとつは1981年、サバ州東部のサンダカン郊外にいたときの話である。セピロクという集落周辺に、オランウータンのリハビリテーションセンターと森林局の研究センターがあって、平地の原生林と集落周辺の里山が隣接する良い環境だった。大学の生物調査で当地を訪れた我々は、研究セン

ターのゲストハウスという、建物は木造で古いが広くてゆったりくつろげる宿泊施設に滞在していた。このゲストハウスの周辺にホタルが飛んでいた。

宿舎は研究センター本館から、草の生い茂る湿っぽい道を50mほど歩いたところにある。昼間はさほどでもないが、夜は歩いていくのに少々勇気がいった。周辺の林の中ではハブの仲間を何匹か捕えているし、すぐ近くの道路にキングコブラのどかいやつが出た、などという話を聞くと、なかなか夜うろつく気にはなれない。そんなある晩、ベランダの椅子に座ってぼんやり外を眺めていた私のすぐそばで、ホタルが光りながら飛ぶのが見えた。何日か前からホタルが飛んでいるのは知っていたが、正体をつかめずにいた私は、このときとばかり捕虫網をつかんで外に飛び出した。キングコブラのことは頭になかった。捕えてみるとそのホタルは、マドボタルの類によく似た、体長17mmほどの黄褐色の種であった。体は小判形で、日本のホタルのような筒形の虫を想像していた私にはちょっと意外な正体だったが、これはゲンジボタルやヘイケボタルを見慣れた日本人の偏見であろう。ホタルはその後またたびたび現れた

が、採ったのはその1頭だけだった。

もうひとつの思い出は1994年、東南アジア最高峰キナバル山でのことだ。山の中腹、標高1,500mあたりに宿泊施設を備えた国立公園事務所があり、登山者や観光客でにぎわう。生物の採集は厳しく制限されていて、あらかじめ許可を取って調査をおこなっていたときのことだ。

ある日、車で標高1,900mほどの所まで送ってもらい、さらに2,400m地点まで登りながらクロツヤムシの調査を行った。夕方、車を下りた地点まで戻ってくると車の姿はなく、我々の他には誰もいないので、仕方なくとぼとぼと車道を歩いて宿舎に帰ることになった。標高2,000mを超えてここで作業を行ったので、体はへとへとに疲れている。拾ってくれる車も通らず、道がリワグ川という溪流に沿って続くあたりまで下りて来た頃には、日はとっぷりと暮れていた。しばらく溪流沿いを歩いていると、ホタルがぼつぼつと飛び始め、やがて数十匹から百匹をこえるホタルが乱舞した。捕虫網を持っていなかったのでホタルの種類は特定できなかったが、不思議なもので、この予期せぬ光景の中を歩いていくうちにみるみる元気は回復し、非常にさわやかな気分で宿舎にたどり着いた。



熱帯林と滝

このような環境にホタルが飛ぶ

パプアニューギニアのある漁村では、「ホタルのクリスマスツリー」が明るく光ると、魚がやってきて大漁になるという言い伝えがあるらしい。日本人のホタルに対する思い入れは特別という気がするけれども、一般にアジアでは欧米と比べて、ホタルが人間の生活と深く結びついているように感じる。それがなぜかはうまく説明できないが、おなじアジア人として、少しうれしく思う。

あれから20年

伊良林小学校ホタルの会 富工妙子

桜も散って葉桜になりかけた4月上旬、小雨が降ったりやんだりする夜に、学校玄関前の人工川から3センチほどに成長したホタルの幼虫が、おしりを光らせながら土にのぼる姿を見る時、実にすばらしい大自然の摂理に感動を感じる。

「ホーホーホタルこい」と唄った幼い日からつい先ごろまで、その生涯を考えても

みなかった私だが、このホタルの灯に魅せられ、ホタルと付き合ってもう20年の月日を迎えようとしている。

昭和57年7月23日 忘れもしない悪夢の一夜であった。校区の児童3名 保護者7名のかけがいのない貴い生命があの大水害で奪われ、美しかった中島川はみるも無惨な姿となりはて、私たちはやり場のない

激しい憤りと悲しみにくれた。そのような中から「中島川にホタルを飛ばそう」という声が上がった。鎮魂限りない祈りを込めて“中島川にホタルを”その声は大きな輪となり広がった。

それからである。ホタルが私の生活の大部分を占めるようになったのは、闇にほのかに光るホタルの灯はまさに幽幻である。夜空にかがやく星は天国へ逝った人々の魂だという。すべての命が天において、さん然と光を放ち不滅の魂として光り続けるのだ...と。私は今もそれを信じている。

ホタルの語源は「星垂れる」がつまったものだといわれている。初夏の川辺で飛び交うホタルの灯が水面に映える様は、あたかも夜空の星が地上に舞い落ちてきたかのようである。天に昇ったすべての人の魂を背負って、ホタルは清らかな水の流れと、やさしい心を持つ人々のところに降りてくる。

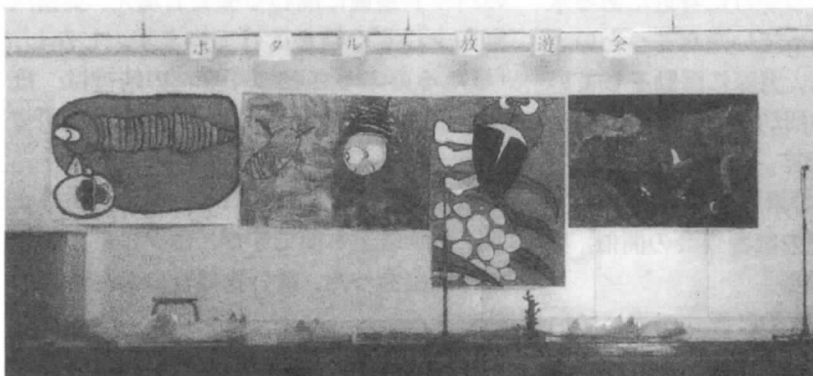
一匹のホタルを生かすため、清らかな水の流れを取り戻すために努力の日々が始まった。暑い日も寒い日もカワニナを求めてさまよい歩いた。日々それがまさに祈りそのものであり、そのことが慰霊であった。

一匹のホタルを飛ばすことは、自然のすべての命を生かすことだと思う。子供たちが豊かな心で自然に親しんでくれるようにと...。あれから20年目を迎える。伊良林小学校では今年も5月31日子供たちと一

緒に慰霊の会「ホタル放遊」を行った。その会で「自然を大切にしよう。川をきれいにしよう。小さな生きものの生命を大事にしよう」そのことをお友達に教えていききたいと環境委員会の子供の作文があった。1人でも2人でもいい。次の世代の子供たちの心の中に永遠に消えることのないホタル灯をともしることができれば...

水害犠牲者の慰霊は活動の柱である。自然環境をよくし親子で手を取り合ってホタルを見に来てほしい。光を点滅させながら限られた短い時間を一生懸命生きるホタル、燃えつき死に絶える命。ホタル見物の道すがら生命の貴さを話し合う場になればそう願っている。

伊良林小学校ホタルの会がベースとなって「ながさきホタルの会」が発足して3年が過ぎた。長崎市内でホタル保護に取り組んでいる人が、互いに交流を深めながら、手を取り合って活動しようと結成した会である。水害後1匹もいなかったホタルも、年々その数を増し定着するようになって来た。これからは数を増やすことより、自然に生育できるきれいな水辺環境を守る取り組みをしていきたい。一人ひとりの心掛けで、自然を守りたいものだ。幼児期の家庭の中でのしつけ、環境教育、学校での環境教育、社会生活の中でしっかりしたマナーの位置づけを人間形成の中で習慣づけていくことが大切だと思う今日この頃である。



ホタル放遊慰霊会

北九州市役所 ほたる係

北九州市建設局下水道河川部水環境課ほたる係 坂田和歌子

北九州市には、全国ただ1つの「ほたる係」があります。ほたる係は、平成4年4月、建設局土木部河川課（当時）という、河川計画・工事を一手に担う組織内に設置されました。これまで土木技術者が中心であった本市の河川事業に、環境という視点を加えていくために、生物職の係長と係員1名で構成されています。

本市では、昭和30年から30年代にかけて、特に市街地を流れる河川の水質悪化が進み、ホタルがほとんど姿を消してしまいました。このことから「もう一度ホタルを呼び戻す」ことが、河川愛護活動の大きな目標となり、特に市の中心部にも近い住宅地でありながらホタルの名所となっている川では、今日まで約20年にわたって市民活動がつづいています。

ほたる係は、このようにほたるを通して河川環境を大切にするための活動をしている市民の方と力をあわせながら、さまざまな生きものが棲息する河川環境の実現を目標に「ほたるのふるさとづくり」を進めています。

《ソフト的内容；ほたる会議、ほたる講座、ほたる飛翔調査、ほたるアドバイザー制度、活動助成制度、その他啓発イベント等》

まずはホタルをきっかけに身近にある水辺の環境に興味を持っていただこうという楽しいイベントから、実際に活動をしている市民向けのより専門的な勉強会や情報交換会までさまざまです。

《河川整備等、実際の事業に係る内容；多自然型川づくり設計方針審査会の開催、身近な水辺づくり事業等》

審査会は、河川整備の計画や工事について、下水道河川部の関係係長以上と担当者

が出席し方針を決定するものです。特に、地方の小さな河川では、まずは住民の生命と財産を守ることを第一に、様々な制約の中で事業を進めているのが現状だとおもいます。そんな中でもここ数年は、担当者から生物の棲息のため何か工夫できないかと相談を受けることが増えてきました。これに加えて何より心強いのは、住民達の“ホタルを守りたい、そのために自分たちに来ることは協力しよう”という声です。これによって整備内容を改善できた事例が複数あります。

また、身近な水辺づくり事業では、工事実施を行う土木や建築の担当者等と協力しながら、平成14年4月開館を目指して、「北九州市ほたる館」の整備を進めています。学習、実験、交流のできる建物施設（廃止施設の建物を再利用）と、ホタル等の飼育ができる実験水路、子供達が遊べるせせらぎ水路を併せ持ちます。完成後は、この施設を中心として市民ボランティアの輪がますます広がっていくよう、活動していく予定です。

来年、ほたる係は誕生10周年となります。当初は市民のソフト事業の支援が中心でしたが、今日では河川や下水道事業などのハード整備に関わる機会も増え、業務内容も少しずつ幅を広げています。しかし、「ほたるのふるさとづくり」の精神は、ほたる係が存在する限り変わらないはずです。

私には、未だ忘れられない経験があります。5年以上も前ですが、ホタル飛翔調査の時に出会った、買い物帰りのお母さんの話です。

「ホタルがいるのを知るまでは、雑草だ

らけでなんてきたない川だろうと思っていたけど、ホタルを見つけてから、こんな雑草もホタルに必要だと知って、大事なんだと思うようになったよ。」

それから、私達は一緒にホタルを数えました。そこは、ほんの数十メートル先の国道3号線からは車の行き交う騒音が聞こえ、川沿いの道はアスファルトで固められた住宅地の真ん中です。ブロック積みの護岸は深く、典型的と思える市街地の中を流れる川なのに、ゆらゆらと飛び交う数十のホタルの光はとても美しくて印象的でした。その時が、私が初めてホタルのもつ力を実感した瞬間でした。彼らの美しい光は、行政が環境の大切さを訴える言葉など

よりずっと人々の心に語りかけ、気持を変えていくことができるのだと。

長年にわたってホタルに関わっている市民の多くが、活動の出発点は子どもの頃ホタルを見て感動した記憶だったり、子ども達にも見せてあげたいという想いだといいます。

ほたる係での在籍期間が長くなればなるほど「ほたるのふるさとづくり」は行政の力だけではとても実現できないと実感します。これからもほたる係は、ホタルと彼ら愛する市民の力をお借りして、私達の街の水辺がより豊かで素晴らしいものになるよう、努力を続けていきたいと思います。

中国と台湾の「螢狩り」のわらべ歌

神奈川県立大師高等学校 後藤好正

人里へのニュースレター第18号で、小西正泰氏が、地方色豊かな螢狩りのわらべ歌を紹介され、最後に朝鮮半島の歌を紹介して終えられていた。こうした螢狩りのわらべ歌はさらに中国や台湾でも歌われているようである。ここでは中国と台湾の歌を紹介したい。

藤野岩友氏の『中国の招魂歌と捕螢歌と』は螢狩りのわらべ歌が招魂(鎮魂)歌の一種ではないかという説を、中国の螢狩りのわらべ歌から補強したものである。ここでは2首紹介する。

・螢、螢、夜な夜なあかい。
天に上りや、雷さまがうつぞ。
地に下りや、火ついでがやくぞ。
早く来い、早く来い。
お前を大事にしてやるぞ。

・螢、螢、夜な夜なあかい。
西に飛んで、
東に飛んで、

小ぢな提灯そっくりだ。

いずれも採集地は不明のようである。中国のわらべ歌では、ホタルを螢火虫のほか、亮火虫、游火虫、火焰虫などと歌っている。また、こうした歌が徐々に変化して、ついには家庭の勤労を歌うわらべ歌に変わってしまったものも見られる。

台湾や中国福建省ではホタルを火金姑と呼び、その由来を説明する昔話があるが、いずれ紹介したい。ここでは台湾の歌を朱耀沂氏の『台湾のホタルーその今昔物語』からひとつ紹介する。

・ホタルさんお茶やろう
お茶が熱けりゃバナナをお上がり
バナナが冷やけりゃ龍眼だ
龍眼いやなら拔仔¹にしたら
だけど拔仔はまだ固い
食べに来たら死んじゃうぞ

* バラァと発音、グワバのこと

事務局からのお知らせ

第2回日本ホタルの会談話会

平成13年9月30日(日)昭和女子大学において第2回の談話会が開催されました。講師は幼虫研究の大家で当会の理事でもあります林長閑さんで、「水生甲虫の幼虫」と題して話題提供して頂きました。まず甲虫類の分類に始まり、成虫・幼虫ともに水生の科(ゲンゴロウやガムシ類など13科)、幼虫が水生の科(マルハナノミ類など4科)、また、一部の幼虫が水生の科(ホタル類など3科)の成虫と幼虫の形態について概説して頂きました。また、甲虫の幼虫が水生生活に適応した呼吸器官についても詳しく解説して頂き、質疑がなされました。

第10回「ホタルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム

平成13年11月10(土)午後1時から上野動物園内動物園ホールにて第10回「ホタルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム～人里に心なごむ自然環境を取り戻そう～が開催されます(日本ホタルの会・東京都恩賜上野動物園共催)。

今回は東京都多摩動物公園の荻野昭さんに「ホタルを飼育して40年」と題してご講演頂きます。また、東京都昭島市の山本矩正さんと茨城県土浦市の川島幸造さんにはホタルやカワニナ飼育の事例についてご報告して頂きます。自治体からは日本で唯一ほたる係が置かれている北九州市建設局水環境課ほたる係の上田直子さんに「ホタルをシンボルとした水辺環境保全の取り組み」についてご紹介頂きます。そして最後に神奈川県立大師高等学校の後藤好正さんに日本の陸生ホタルについての話題を提供して頂きます。

当日はシンポジウム案内のハガキをご持参下さいますようお願い致します。動物園入り口にてハガキをご提示頂ければ、そのまま入園できます。お知り合いでシンポジウム参加をご希望の方がございましたら事務局までご連絡お願い致します。追って案内のハガキをお送り致します。

人里へのニュースレター 第19号 平成13年10月31日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局
発行 矢島 稔
156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6
ステーションプラザ代田橋410
(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局
TEL & FAX: 03-3328-7379
e-mail: KYW07337@nifty.ne.jp

印刷 システム印刷株式会社
191-0031 東京都日野市高幡454
TEL: 042-591-1411 FAX: 042-591-7701